

事業規模を広げず、 技術の幅を広げる

不二合金株式会社

代表取締役

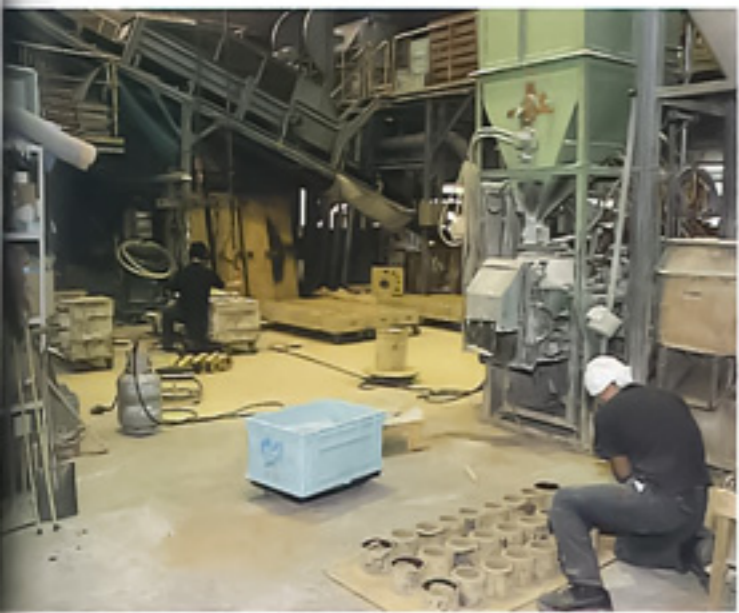
遠藤和男さん

会長

遠藤登さん

工場長

遠藤篤志さん



01 現在までの歩み 銅合金にこだわった鋳物作り

「33歳の頃に初代の父が亡くなり、すぐに会社を継ぎました。うちが今まで続けてこれたのは、銅合金の中でも特殊な素材で鋳物を作ってきたからだと思います」。そう話すのは、90歳を超えても会長として、不二合金を支える2代目遠藤登氏だ。

戦後、同業者は大阪府下だけでも240社以上に増えたが、オイルショックやリーマンショックなどに加え、高齢化や、需要の変化などにより、最近では20社程しか残っていないという。

「鋳物屋は吹き出物と一緒に、大きくなるとつぶれる」。これは初代がよく言っていた言葉。最終製品まで作れる会社なら別だが、下請けの会社が事業を広げすぎると、うまくいかないのだという。

不二合金は創業1916年(大正5年)以来、銅合金にこだわった鋳物作りを続けている。

父から帰ってくるよう頼まれた。

「鋳物は手先が器用じゃないとできない仕事。自分にはちよっと向いてないと感じてたんです。でも継ぐためには絶対、製造の現場で仕事を覚えなさいといけなと思っていました」。入社後、和男氏は現場で20年近く経験を積んだ。

現在では、和男氏の次男篤志氏と三男恵士氏も入社し、祖父や父と共に会社を支えている。篤志氏は自身が現場向きだという。「僕は、手先が器用な方だけど、口下手なんです。でも弟はしゃべることが得意で明るく、人に好かれやすいから、営業向き」。

和男氏も「現場と営業は全然違う」と話す。現場は突き詰めて考えながら取り組まなければならないが、営業は特殊な話力が必要。鋳物の性質上、外観から不良かを判断するのは難しく、出荷先が加工して初めてわかる場合があるのだそう。

「お客様には鋳物について正しく理解してもらい、万一の時でも納得してもらえよう。営業力が必要。だから将来的には、兄弟二人で協力してやっつけたいと考えてます」と微笑みながら和男氏は話す。

02 事業承継 親子三代で支える

3代目の代表取締役遠藤和男氏は学生の頃から、いずれ自分が会社を継ぐことになると感じていた。大学卒業後、設計会社で働いて数年した頃、業績悪化を理由に



03 事業展開

景気に左右されない経営

不二合金では、初代の考えを引継ぎ、経営規模を拡大せず、景気の変動に左右されない、手堅い経営に取り組んでいる。

「景気が良い時は悪い時のことを考えて、悪い時には良い時のことを考える。暇になったら新しいことにトライしてみる。従業員を必要以上に抱えない。良い時も悪い時も同じようにやっていくことが大事だと思っています」と和男氏は語る。

また、不二合金では積極的な営業をしていない。同業者が減少する中、HP等をきっかけに自然と取引先が増えていく。うちが営業して取りに行った仕事ではないので、材料費の高騰も無理せず、なるべく値上げで対応してもらっています」と和男氏は話す。

また、取引相手を一つに絞らず、複数の企業と取引をすることでリスク分散を図っている。「うちには下請けなので、お客さんに仕事がないければ、どうしようもない。だから、景気の変動や為替の影響を受けにくい仕事を



選び、下請けを大切にしてくる企業と取引をするようにしています」。

04 人材育成

考える職人を育てる

鋳物は、およそ1200℃の溶解炉の温度が、10℃変わるだけで不良品になることがある。「長年培ってきた技術が先代たちが伝承してき



たからこそ、よそではできない製品が作れる」と篤志氏はいふ。不二合金の特徴は多品種少量生産。製品に応じて細かく製法を変えているため、職人が考えながらモノづくりをしなければ、良い製品は作れない。「一方的に職人へ指示するのではなく、自ら考えるよう、相談しながら進めています。職人が『自分で考えて作る』ことを意識するだけで、達成感や喜びが膨らむと思うんです」。

また、和男氏によると鋳物作りには共同作業が多いのだという。「だから、きっちり仕事ができる、モノづくりが好きで必要な人材が必要です。そのためには、会社で出た利益はできるだけ、従業員に還元しています」。

05 未来に向けて

鋳物技術を伝承

廃業していく同業者には、そこにしかない独自技術を持つ会社も多い。しかも、鋳物業界は横のつながりが弱いため、多くの技術が途絶えているという。

「廃業する世代だけでなく、その前の世代が築いてきた技術が廃れていくのは、もったいない。会長がしていたように、同業者からの相談も受けているし、現場も見てもらっています」。技術だけでなく、会長の精神も受け継がれている。「でもね、うちの技術はすぐに真似できるものではないですけれどね」と笑いながら和男氏は話す。

今後の不二合金を担う篤志氏は、「不二合金が培ってきた技術や知識、経験といった鋳物への気持ちを次の代に伝承していきたい」と語る。「現状維持では仕事は増えないので、ステンレスやチタンといった新しい材料を導入して、医療や宇宙などの新分野に参入してみたいです」。

次世代経営者へのアドバイス

《2代目 登氏》うまくいくことよりも、いかなることの方が多。とにかく誠実に対応することです。

《3代目 和男氏》学生時代にいろんなことをやって経験を積むこと。そうすれば、もの見方が広がります。

経営者のターニングポイント

15歳
1938年
(昭和13年)

《2代目 登氏》戦争
戦前は、民生品を主に製造してきたため、戦争によって仕事の規模が小さくなる。戦後は銅等の需要で回復した。

35歳
1988年
(昭和63年)

《3代目 和男氏》会社を継ぐ
業績悪化により、父から戻ってくるよう頼まれる。当時、設計会社で働いていたが、不二合金へ入社。会社の立て直しを図る。

55歳
2008年
(平成20年)

《3代目 和男氏》リーマンショックによる打撃
業績が悪化し、希望退職を募るなどで危機を耐える。また、その直前に息子が不二合金に入社したことから、体制強化を図る。

50歳
1973年
(昭和48年)

《2代目 登氏》オイルショック
オイルショックによって大打撃を受ける。10年ほど厳しい経営状態が続いた。

50歳
2003年
(平成15年)

《3代目 和男氏》現場と営業の掛け持ち
頼りにしていた工場長が体調不良となり、現場と営業を一人で指揮しなければならなくなった。



不二合金 株式会社

創業年	1916年(大正5年)
代表者	代表取締役 遠藤 和男
業種	鋳物製造・販売
従業員数	10名
資本金	1,000万円
住所	堺市西区浜寺船尾町東1丁5番地
TEL	072-262-9440
URL	http://www.fujigokin.com/

事業概要

1916年に遠藤 孫吉氏が大阪市内で「遠藤合金鋳造所」を創業。当時は、8メートル四方の小さな工場、バルブやコック等を鋳造していたが、戦争によって原材料が逼迫し、事業規模が縮小。1938年に堺市内へ工場を移転。1953年には不二合金を設立。独自の技術により、銅合金にこだわったモノづくりをしてきた。1997年には3代目 遠藤 和男氏が代表取締役に就任。現在は親子3代にわたり、現場を指揮、その技術を若い世代へとつないでいる。

銅合金に こだわる!

手を広げず
技術に
磨きを



大阪府堺市の不二合金（☎072・262・9440）は、平成28年に創業100周年を迎える。銅合金にこだわり、手を広げずに技術に磨きをかけながらさらなる長寿企業に挑戦する。

●●●●● **堺市の不二合金**

「大正5年の創業以来、鋳物づくりに取り組んできました。ここまで長く続けられたのは、ほかの商品に手を出さずに鋳物に絞り込んだからでしょう」と、3代目の遠藤和男社長。独自の技術にこだわり、銅合金の鋳物づくりに徹する。

ギア、軸受などの多品種少量

の特殊鋳物部品、造船関連では船舶のベル、汽笛に使われる鋳物部品を製造する。国産でベルや汽笛の鋳物部品をつくれるのは、今では同社だけとなった。

「納得する鋳物をつくってくれるところが少なくなる中、同業者が廃業したのでぜひお願いしたいと、営業しなくても注文が舞い込みます」と。ホームページやクチコミ

で受注、売り上げを伸ばしている。中でも船舶用ベルでは累計4万個を突破し、日本の造船業を陰でしっかり支えている。

創業100周年

明るく、キレイな工場では若手社員が目立ち、手作業で鋳物づくりに取り組む。「若い人材が増えています。これからは銅以外のチタンなど新しい材料にも挑戦したいですね」と遠藤社長。

次の100年に向かって新たなスタートを切ろうとしている。

